

## 隆正の古語解釈について

山本寿夫

## 一

岡山地方に「ぼつこう」という方言があつて「甚しく」とか「たいへん」とかいふ意味に使用されてゐるのであるが、その本来の意味、いはば語原については、まだ説明されてゐないやうである。一方「馬鹿」といふ言葉があつて全国的に使用されており、勿論岡山地方においてもひろく用ゐられておるのである。いまこの語について大言海をひいてみると、

バカ(名)馬鹿〔馬鹿ハ當字ナリ。梵語 Mōha(慕何、痴ト譯ス)又ハ Malalaka(摩訶羅、無知ト譯ス)ノ轉ニテ僧ノ隱語ニ起レル語ト云フ、或ハ耄<sup>ボケ</sup>ノ轉カトモ云フ。秦ノ趙高が鹿ヲ指シテ馬ト言ヒシニ附會シテ馬鹿ノ字ヲ當ツルナド湯桶讀ナルノ拙キノミニアラズ、趙高が事ハ、欺キテ侮蔑シタル意トハナレ、愚ナル意ヲ成サズ〕

(一) オロカナルコト。又愚<sup>ダ</sup>。アハウ。ヨコ。シレモノ。ウツケモノ。タハケモノ。マヌケ。アンボンタン。ベラバウ。痴呆<sup>チダイ</sup>。

とあつて、次に用例を、太平記・十六・本間孫四郎遠矢事、後撰夷曲集(寛文)、拾遺集・九・雜下、等より引用してゐるのである。しかもして諸辞典類概ねこれを踏襲してゐるやうであるが、これはすこし無理なやうに思はれるのである。秦の趙高云々は勿論問題にならないが、僧の隱語の梵語に由來するといふのも、文字に目のある、読書人たる僧の隱語が何等の原因なしに、かくも全国津々浦々隅々に至るまで使用されるといふのは不思議である、その梵語に相應する古來の日本語がないのであればともかく、いくらでもある。このやうな語が、さうなるといふのは少しく無理であるといはねばならない、又耄<sup>ボケ</sup>の轉といふのも、馬鹿に「非常に」とか「たいへん」とかいふ用法があつて、耄にはその用法なく、どうも二語別物のやうである、この点について注目すべきは民俗学の成果である。それによれば、大言海の解に示してゐる、「ヲコ」こそその語原であるとすべきである、それは「おろかなること」を意味する語であるが、ワ行音は、たやすく、バ行音に転化することから「ヲコ」が「バコ」とか「ボコ」に、或は「バッコ」、「ボッコ」、とか「パウコ」「ボウコ」とも變化するであ

らうことは容易に考へられるのである。又「コ」はカ行音であるから同行の「カ」にも「キ」にも容易に変化するであらう。事実民俗学は各地にこれ等の語のあることを報告してその意味、用法の「ヨコ」に近く、或は訛りであることをいつてゐるのである。であるならば、馬鹿は梵語より來るものでなく、本來の日本語の「ヨコ」の訛りであり、転化であるとするはうが、意味用法の上において無理がないのである。ここに岡山地方の方言といはれる「ぼっこう」も「ヨコ」が馬鹿に変化する中間過程における訛りの一つであると考へられるのである、そして「アハウ」、「シレモノ」の意味用法を失つて、専ら、「非常に」「たいへん」という意味にのみ用ゐられると考へたらよろしいのである。だから「ぼっこう」は「馬鹿に」といふこと等しいのである。いふなれば「馬鹿」と「ぼっこう」はどちらが訛りともいへないといふことになる。

## 二

このように直接意義不明の語をその語原より説明しようとするに當つて、縦に時間による変化を文献の上にあとづけて古語よりの転化を説明しようとするのは、江戸時代国学者の何人も試みた所であり、大いにその成果をあげた所でもあるのである、しかし一方時間的変化がそのまま空間的に横にひろがつて存在し全国各地の現在の状況にあらはれ示されてゐるとして、それを全国にわたつて克明に収集し、整理し、系統だてて、その基礎の上に立つて説明しようとする者、いはば民俗学的方法をとつたものがあつたであらうか。いま本居宣長に

ついでこれをみるに彼は、その著「玉かつま」において

①すべてゐなかに、いにしへの言ののこれること多し、殊にとほき國人のいふ言の中には、おもしろきことどもぞまじれる、おのれとしごる心をつけて、遠き國人の、とぶらひきたるには、必その國の詞をとひききもし、その人のいふ言をも、心とどめてききもするを、なほ國々の詞共を、あまねく聞あつめなば、いかにおもしろきことおほからん、ちかきころ、肥後ノ國人のきたるが、いふことをきけば、世に見える聞えるなどいふたぐひを、見ゆる聞ゆるなどぞいふなる、こは今の世にはたえて聞えぬ、雅びたることばづかひなるを、其國にては、なべてかくいふにやととひければ、ひたぶるの賤山がつか皆、見ゆるきこゆるさゆるたゆる、などやうにいふを、すこしことばをもつくるふほどの者は、多くは見える聞えるとやうにいふ也、とぞ語りける、そは中々今の俗きいひざまなるを、なべて國々の人のいふから、そをよきことと心得たるなゞめり、いづれの國にても、しづ山がつかいふ言は、よこなまりながらも、おほくむかしの言をいひつたへたるを、人しげくにぎははしき里などは、他國人も入まじり、都の人なども、ことにふれきかよひなどするほどに、おのづからこかしこの詞をききならひては、おのれもことえりして、なまさかしき今やうにうつりやすくて、昔ざまにとほく、中々にいやしくなんなりもてゆくめる、まことや同じひごの國の、又人のいへる、かの國にて、ひきがへるといふ物を、たんがくといふなるは、古のたにぐゝの訛りなるべくおぼゆ、とかたりしはまことに然なるべし、此たにぐゝのこと、國々になほ聞ることおほかるを、いまはふと思ひ出たことをいふ也、なほおもひいでむまに、又もいふべし。

といつて、古語が中央よりは反つて交通懸絶した山間地方に訛りながらも残存してゐることに着目し、これを収集することの重要さを強調

してゐるのである。又別に

② 詞のみにあらず、よろづのしわざにも、かためなかには、いにしへぎまの、みやびたることの、のこれるたくひ多し、ざるを例のなまさかしき心ある者の、立まじりては、かへりてをこがましくおぼえて、あらたむるから、いづこにも、やうやうにふるき事のうせゆくは、いとくちをしきわざ也、葬禮婚禮など、ことに田舎には、ふるくおもしろきことおほし、すべてかかるたくひの事共をも、國々のやうを、海づら山がくれの里々まで、あまねく尋ね、聞きあつめて、物にもしるしおかまほしきわざ也、葬祭などのわざ、後、世の物しり人の、考へ定めたるは、中々からごころのさかしらのみ、多くまじりて、ふさはしからず、うるさし。

と言つて、言語のみならず進んで風俗行事にも関心をよせて、山間各地に純粋な古風が保存されてゐること強調して、それを全国にわたつて、あまねく収集し整理し、記録することの必要性を強調し、あはせて、なまはんかな知識人によつて古風が破壊されてゆくことを慨嘆してゐるのである。又

③ 歌まくらにまれ、何にまれ、はるかなるいにしへのを、中ごろとめうしなひたるを、今の世にして、たづね定めむことは、大かたやすからぬわざになむ有ける、其ゆゑをいはむには、まづ此ふるき所をたづぬるわざは、ただに古への書どもを考へたるのみにては、知リがたし、いかにくはしく考へたるも、書もて考へ定めたることは、其所にいたりて見聞けば、いたく違ふことの多き物也、よそながらは、さだかならぬ所も、其國にては、さすがに書もつたへ、かたりも傳へて、まがひなきことも有り、さればみづから其地にいたりて、見もし、その事よくしれる人に、とひききなどもせでは、事たはらず、又ただ一たび物して、見聞たるのみにても、猶たはらず、ゆきて

見聞て、立かへりて、又ふみどもと考へ合せて、又々もゆきて、よく見聞たるうへならでは、定めがたかるべし、

と述べて、文献、資料の調査のみならず、広く全国にわたる実地踏査の結果と文献の比較考察によつてはじめて正確な研究が進め得られることを強調し、つづいて、「いにしへの事をあまりたしかにしりがほにかたるは、おほくは、書のかたはしを、なまなまにかむかへなどしたるもの、おのがさかしらもて、さだめいふが多ければ、そはいと頼みがたく、なかなかのものぞこなひなり」とか「ふみなどは、むげに見たることなき、ひたぶるのしづのを、おぼえてかたることは、しり口あはず、しどけなく、ひがごとのみおほかれど、其中には、かへりておかしき事もまじるわざなれば、ざるたくひをも、心とどめてきくべきわざ也、」とかいつて実地踏査の際の注意事項を具体的にこまごまと述べてゐるのである。これらを要するに宣長においてはその尨大なる資料の研究にも不拘なほかつ、全国にわたる地方語の収集整理記録のみならず、風俗習慣行事傳説口碑の実地踏査とこれが収集整理記録とが古語解明に重要な役割を果たすことを認め、これが必要性を強調してやまないのである。これは三千人といはれる莫大な数にのぼる門人が全国に散在する宣長にとつては気付かずにはおれなかつた所であらう。しかしながら実際は必ずしもその主張通りには行はれてゐないのである。これは当時の交通通信の状況のしからしむるは勿論適当な協力者が得られなかつたからかも知れない。とにかくその主著古事記伝を検討してみても、その主張は殆んど行はれてゐないことをしるのである。しかしながらともかく国学の最高峰たる宣長はこ

の点に既に気付いてゐたといふことは注目すべきことであらう。

### 三

さてわが大國隆正は如何であらうか、彼は宣長とちがつて、その居所を石見津和野、京都、長崎、江戸、大阪、三河吉田、播磨小野等々と転々としておるのであり、したがつて見聞する所も全国各地にわたり、門人も交友も鈴木重胤、福羽美静、玉松操等をはじめとして、多くの地方の出身者を含んでゐたと思はれるのである。又

④おのれはそのはじめ、故ありて平田翁の紹介にて村田春門の翁の並樹といはれしころ入門したりき。されども篤胤翁をも師のごとく思ひてありしなり。おのれ師のごとくしたひし故にや翁も又弟子のごとく思ひておはしけん。此ごろ平田翁の門人帳を見れば、おのれが十六のとしの門人帳に前名にてかき加へてあり。いと嬉しくさてはおのれも此的傳のうちにくははりてありけりと思ふ云々

と平田篤胤の門人たることを誇りをもつて自認し、更に

⑤吾がいくばくもあらぬ門人どものわれを五祖とやおもふらん。おのれはかの四大人にはかけても及ぶべからぬものなれば、おやと慕ふをしへ子のためにはかつかつもその四大人に似たるものと思ふらん。

と国学の五祖をもつて自ら任じてゐるのである。かつその四祖とは、

⑥「近き世にいたりその兩部・唯一ともにわが古道にたがへりといふ眼をひらきて神道のまことをひきおこしたる人四人あり。羽倉春満・岡部眞淵・本居宣長・平田篤胤これなり。」といつておるのであり、かつ「本居をにくみてその所説をうちたるは、藤井貞幹・上田秋成・荒

木田久老・村田春海・橘守部・香川景樹その外いと多かり。平田翁をにくみてその所説をうちたるは、本居大平・伴信友・足代弘訓その外數かぎりなし。そはおのが丈のひくきをしらず、かれよりも丈高き心になりて誇れるものなり。人の著述のあしきことをとり出ていはんに

は、いふべき事のいくらもあるものなり。それらの人は初祖・二祖・三祖・四祖と傳へられし心中の道統をしらず。只小事に就ていひしらへるものになん。」といつて、四祖を反論批判する者をばいたく攻撃するのであるから、隆正が本居の学徒をもつて自ら任じてゐることは明らかであらう。さらば古語解明の方法について宣長が既に気付いてゐた前述の点は交友弟子全国にわたり、かつ自ら宣長の学徒をもつて任ずる隆正においては如何であらうか。いま主著たる宣長の古事記傳と隆正の古傳通解とを比較してみると、宣長の古事記傳には僅少ながらもその例が存するのである、例へば卷三に

⑧彼考に云く、久爾と云名は限の意なり東國にて垣を久爾と云にて知べしと云ひ或は同じく卷三に

⑨古へ東人はさかしらなる心を添ずて、言傳へたる言のままにうち云めれば、京の物知人モノシヒトの歌よりも、返りて古言ヨリドコロの據とすべき物ぞと云れき、都知ツチを東言に都之とは云るなるべし

とあり、或は卷四に

⑩今も遠江のみならず、餘國にも然云処々もあるなり

と云つてゐるものこれである。しかるに隆正の古傳通解には全くこの態度がとられてゐないのである。いま「クニ」について述べてゐる所をみると

## 四

⑩ くにむかへていふあめは、編を本にして末に浴すところあり、網するところあり。網するはかけてひくなり。日球はひかりを地球へかけてひき、地球は蒸気を日月星辰のかけにかけてひくものなり。

と云ひ、又

⑪ くにむかへていふあめは、神のすみたまふ世界にて、これは、日輪中にある幽界をいふなり。これは、編といふことばより、いでたるあめなり。また網すということばのころにかなへり。編は籐をあみ、蓆をあむたぐひ同じかたちのものをつぎつぎにひきよせ、合せゆくをいふことばなり。網ももとは糸を編みて作るものなれど、つくりをへぬれば、浴すといふことばのごとくかれに浴しかけて又わがかたにひきよするところなり。編はちひさく、編すは大きくひきよするところなり。論語の古訓に「アミスレドモ」とあるたぐひこれなり。云々

と述べてゐるのをみても、宣長の気付いてゐた方法は見事に忘れられてゐるのである。そればかりか、われわれは、ここには宣長と異質なものの存するのに気付かずにはおれないのである。それはむしろ一種の神道思想体系より導き出された言語解譯であり、又言語の神道思想的な体系化であるといつてよいであらう。実はこれこそ隆正の全力を傾注する畢生の大業であり、彼の学問の骨髄であつたのである。したがつて、宣長の気付いてゐた古語解釈の一方の継承発展のごときは顧みる余裕をもたなかつたのである。次に彼の古語解釈の方法について述べてみよう。

⑫ 「上つ代はことばに今古の別ちなかりしにより、古言をとく学業とはなかりしを、時代のうつりゆくにしたがひ、音便によこなまり、外國の言語をまじへなどして、つひに今古のわかちいできたるにより、おのづから古言をとく学業はおこれるなり。」といつて古語解釈の業の発生と必要とを説く隆正は、つづいて契沖・真淵・成章・宣長・春庭等の功績を述べて「今古に比類なくまことにたふとし。世の人、今にして古言をしり、これをとき、これをつかふはこの五人のかけになんよりける。」といつてその偉大さを一應は讃へるのであるが、しかしながら、その著通略延約辨においては

⑬ しかはあれど古言の宗これにてことつきたりとおもふはたがへり。いとひにくきことにはあれど、この五人の説は、このみちのはじめをなせるまでにて、隆正が眼よりみれば、いまだしきことおほかり、

といつて自らの体系に比較して、その未熟なるを痛論するのであり、⑭ 「隆正この五人の功績につき、五十音にいたく心をつくして、つひにことばづかいの真理を見ひらきたり。」と高言するのである。一体彼の体系は如何なるものであるか、本教神理説一に

⑮ これはあといふころのころなり。これはおのれ二五五六のとし、考へ定めたりしことばなり。それより四十とせばかりのとし月をへて、本末のことばを考へ定めしなり。その中の間にて五十ばかりのとし、なかといふことばのころをさととりて圓理をしれり。

と云つてゐるのを見れば、彼の古語解釈の方法の体系化はその二十五

六才の時に出発して四十年間を費やし、言語に本末のあることを考定して完成するのであるが、その中間五十才頃になかといふ語の意義を悟り、圓理を理解したといふのである。これは又一方彼の古語解釈の体系の要領を示してまことに適切な語といふべきである。即ち「もとすゑのことば、ことばのもと、みちのもと、この三つのことば合せて野之口一家・本学神理の要領とす。」るものなのである。ここに「こゑのころなり云々」といふのは「えざればへがたく、へざればえがたしといふことは、二十四五のときおもひえたることばなるを、ここにかきそへたるは、みちをもとむるところふかく、しかして年月をへざればえがたきことをしらしめ、かつこのふたつのことばは、はたらきことばのもとなることをしらしめんとのことになん。」といつてゐる如く、五十音図の各字音にそれぞれの意味のあることを考察し、その字音を語頭にして活用する語（動詞）が少くとも同行においては相関連して密接なる意味連関のあることを発見し、これを広く且つ深く体系化せんとしたのであり、しかも彼の独特の神道思想によつてこれが貫かれてゐるのである。即ちあまねく動詞全般にわたつて神道思想的にこれを体系化せんと企だてたのであり、かつ又この体系によつて逆に古語の解釈をも企だててゐるのでもある。又「本末のことばは云々」といふのは例へば

(本)君に(本)臣民をむすびよせたまふは神わざなり。(本)(本)君臣民あひおもふは、人のまことなり。萬の事、(本)君によるをよしといひ、(本)君に背くをあしといふ。たては君・臣・民ぬきは臣と臣、民と民あひたすくるをよしといひ、あひそこなふをあしといふ。

と本教神理説にもいふ如く形容詞を常に對<sup>ツイ</sup>になるやうに整理するのである。即ち一語あれば必ずその「反對<sup>ツイ</sup>」の語あり、かつこれが相関連して変化することに着目して、広く形容詞全般にわたつて、彼の所謂反對<sup>ツイ</sup>の理によつて整理し、之を彼の神道思想的道徳体系にまとめあげるのであるが之についてはここに詳論するいとまをもたない。ただ彼においては言語の体系は即ち道徳の体系でもあることは注目しておかねばならぬのである。次になかといふ語の意義を悟り、圓理を理解したといふのは、例へば古傳通解をみると

まづなかにかたよらぬなか、あひだをいふなか、うちをいふなかの三つあることをつまびらかにすべし。うごかぬなか、なかにつくなか、なかにつかぬなか、つらぬくなかこれらはかたよらぬなかに、そのわかちおのづからそなはれる天地間の道理にて、この外にあひだをいふなか、うちをいふなかはあるものなり。(中略)この三つのなかを合せてみれば、おのづから眼前に一圓相はあらはれいづるものになん。外國にて道とき教をたつるものみはこの一圓相をもとにたてしは、おのづから天之神道にて、なかといふことこのころを得て、つくりいでたるものとしられたり。

とあり、なかといふ名詞に三意あり、しかも各々密接に連関する所に着目し、「なか」よりはじめて広く名詞を整理体系化するのである。これよりして、宇宙天然の存在原理より人倫當為の道に至るまで一切の原理を神道哲学的に此の言語体系により説明してやまないのである。ここに於ては彼の言葉の体系は宇宙萬物の存在原理の体系であり、運動の方則であり、道徳の根源でさへあるのである。いふなれば彼はまさに言葉によつて一切を体系づけたのであり、彼においては言

語の体系こそ一切であつたわけである、故にかかる体系の中において古語もとり上げられ、説明され、而して活用される他はなかつたのである、されば宣長によつて気付かれてゐた彼の古語解釈の一方法の如きは隆正においてはまさに顧みられる余裕いや価値さへなかつたといつても過言ではあるまい。その事は彼の宣長学に対する批判にも明らかに認められる所であるが、これについては機を得て詳論することにする。

註①	玉かつま七	本居宣長全集第八卷二二一頁
②	同 六	同 一八〇頁
③	同 八	同 二一五頁
④	学統弁論	大國隆正全集第四卷一五七頁
⑤	同	同 一五七頁
⑥	同	同 一五〇頁
⑦	同	同 一五五頁
⑧	古事記傳三	本居宣長全集第一卷一三二頁
⑨	同	同 一三二頁
⑩	同	同 一八九頁
⑪	古傳通解一	大國隆正全集第六卷 三六頁
⑫	同	同 三三頁
⑬	通略延約辯附言	大國隆正全集第四卷二四一頁
⑭	同	同 二四一頁
⑮	同	同 二四二頁
⑯	同	同 二四二頁
⑰	本教神理説	第五卷 三頁
⑱	同	同 四頁

⑲ 本教神理説  
 ⑳ 同  
 ㉑ 古傳通解二

三〇  
 大國隆正全集第五卷 三頁  
 同 七頁  
 同 第六卷 六四頁